



何もしなくてよい or これをすると良い

もし目の前で苦しむ人がいるとき、何もしなくて良いと指示される方が嬉しいでしょうか。それとも、これをするとういと指示される方が嬉しいでしょうか？最近、“何もしなくて良い”という言葉聞く機会があり、少し違和感を覚えていました。看取りというきわめて大きな苦しみを抱えた人に関わる事を伝えていく上で、苦手意識を持つ人達に、関わる自信を持つために何を学ぶと良いのか、こだわってきました。そこで意識してきたことは、何をすると苦しむ人の力になれるのか、援助を言葉にすることでした。以前に看取りに苦手を持つ介護スタッフから伺った話です。

- ・施設で勤務していて、看取りの経験がない中で夜勤一人の時に何かあったらどうしたらよいのか、知識も教育もほとんどない
- ・具体的にどのように関わってよいかわからない。
- ・食べることも話すことができなくなっていく人に、できることなど思いつかない
- ・何かしてあげたい。だから何かできる処置があればやりたい

9時-5時で仕事を楽に切り上げたいという人達ではありません。少なくとも苦しむ人の力になりたいと願いながらも、どのように関わって良いのかわからない人達です。このように悩むのは、必ずしも介護スタッフだけではありません。多くの医療者も、治すことだけしか学んでこない医学教育の影響からか、明らかに迎えが近いにもかかわらず、毎日のように点滴や抗生剤、画像検査の指示を出すことしか関われない人達もいます。

では、このような人達に、何もしなくて良いという言葉が響くでしょうか？私は、するなと言われると、したくなる文化があると感じています。典型的な話は、鶴の恩返しです。見るなという指示（タブー、禁忌）を破ることは、昔から神話の世界でも出てくる人間の本能です。このあたりはユングの異類婚姻譚（いるいこんいんたん）の話なども含めて、示唆に富みます。

選ぶことができる自由と言う基本的な人権から考えれば、するなという束縛は、苦しくなり、その縛りを破りたくする人は必ずいると考えます。だから、“何もしなくてよい”、ではなく、“これをするとういと”と表現した方が現場の人達には響きやすいと思います。

では何をしたら良いのでしょうか？何をしたら、間もなく迎えが来る人達の援助になるのでしょうか？

そこでのこだわりは、顔の表情です。どんな言葉をかけ、どのような態度で関わると、穏やかになれるのか？です。ユマニチュードも含めて、たとえ認知症であったとしても、1人の人間として尊厳を保つ関わりをすれば、穏やかになっていきます。同じように明日

にお迎えが来るとわかっていても、痛みや苦痛が少ないこと、希望の場所で過ごせること、そばに安心できる誰かがいること、希望しない医療処置がなされないこと、経済的な配慮があり、こだわってきたことができなくなったとしてもゆだねる相手がいること、どんな状況でも自分の役割があると思えること、自分が大切に思ってきた誇りをわかってくれることなど、何気ないことですが、穏やかになれる支えを言葉にできたならば、関わる可能性が見えてきます。

看取りという現場で、たとえ日に日に食事が少なくなり、歩くことが難しくなり、やがてお迎えが来たとしても、何もしなくて良いという言葉ではなく、これをするとういと良いですねという言葉で、看取りの関わり方を伝えたいと思います。

小澤竹俊

死の臨床研究会 年次大会

12月8日9日に新潟で死の臨床研究会年次大会が開催され、クリニックからは4名参加がありました。院長は企画委員会委員長として“真の援助者を目指して”のシンポジウムの座長を担当しました。1日目の朝にもかかわらず500名近い参加者がありました。2日目にはめぐみ在宅クリニックでのディグニティセラピーの現状と課題についてポスター発表する機会がありました。多くの皆様との交流、意見交換の場がありました。



診 療 実 績

	2006- 2017年	2018年 1-8月	2018年 9月	2018年 10月	2018年 11月	2018年 計	総計
訪問回数	60,086	7,134	824	892	921	9,771	69,857
自宅永眠	1,985	171	17	27	24	239	2,224
施設永眠	281	45	7	5	5	62	343
在宅 (自宅+施設)	2,266	216	24	32	29	301	2,567
病院永眠	594	84	9	11	8	112	706